

## ●第15回講座「ICT機器の活用」

平成28年11月12日（土）に、学習目標を達成するためのICT機器の活用について、第15回講座が行われました。

講義では、国立教育政策研究所教育課程研究センター 鹿野利春教育課程調査官をお招きして「学習目標達成のためのICT機器の効果的な活用について」をテーマに学習指導要領の改訂の動向やアクティブ・ラーニングと観点別評価についてお話をいただきました。鹿野調査官からは、児童・生徒の主体的な学びを充実させるためには、教師がICT機器を活用する場を設定することが求められるとのお話があり、塾生は授業におけるICT機器の活用について理解を深めました。また、小学校で実践されているプログラミング教育の紹介があり、児童が試行錯誤しながらプログラミングしたロボットを動かしている姿に、驚きの声が上がりました。



—鹿野調査官  
の講義の様子—

後半では、小学校コースと特別支援学校コースに分かれて演習が行われました。

小学校コースの演習では、タブレット端末用授業支援アプリケーションソフトウェアを使って、児童の考えを教師が効率的に集めたり、個に応じた指導を行う方法を学びました。画面に映し出された児童・生徒の姿を通して、塾生はICT機器の活用により、児童・生徒が実感をもちながら学習内容の理解を深められることを認識し、授業におけるタブレット端末の活用について話し合いながら、演習に取り組む姿が見られました。



—小学校コースの  
演習の様子—

特別支援学校コースの演習では、情報モラル推進校の指定を受けている都立石神井特別支援学校の高橋真吾教諭をお招きして、ICT機器を活用した授業実践についてお話をいただきました。高橋教諭からは、タブレット端末を活用した映像表現や3Dプリンタを活用したクッキー型の制作等、具体的な実践例を多く紹介いただきました。塾生からは特別支援学校におけるICT機器活用の有効性を理解することができたという声が多く上がりました。演習の後半では、実際に特別支援学校の授業で活用しているビジュアルプログラミング言語を使って、プログラミングを行いました。塾生は、自ら描いた絵にプログラミングをする動画作りに取り組み、特別支援学校におけるプログラミング教育への理解を深めることができました。



—特別支援学校コース  
の演習の様子—

### 【塾生の感想より】

- ・ICT機器を使うことで、児童・生徒の学習の質を上げられることを学んだ。ツールであるICT機器を有効活用し、児童・生徒にとってより良い授業をしたい。
- ・ICT機器を活用することで視覚的に支援をしたり、子供たちの創造性やアイデア、表現力を育んだりすることを学んだ。子供たちの可能性を広げていくためにもICT機器を積極的に活用していきたい。
- ・アプリケーションソフトウェアを子供の実態に合わせて使っていきたい。

## 英語に関する講座「外国語活動の模擬授業」

東京教師養成塾では、今年度から年間8回の英語に関する講座を実施しています。11月に第5回と第6回の講座が行われました。

第5回では、東京都の独自英語教材である「Welcome to Tokyo」を使って、道案内・観光案内のレッスンプランを作成し、模擬授業が行われました。英語に関する講座で学習したアクティビティを用いながら、児童が外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるように授業を工夫している様子が見られました。模擬授業を通じて、塾生は外国語活動の授業の楽しさを実感し、外国語活動の授業への理解を深めることができました。

### 【塾生の感想より】

- ・外国語活動も他の教科と同じようにねらいをもって授業を行うことが大切だということが分かった。
- ・歌のバリエーションを変える楽しさ、ジェスチャーの重要性を痛感した。



—模擬授業の様子—

## ◆ 学習指導における評価 ◆

東京教師養成塾教授 青木 秀雄

塾生も伸長期の終わりの時期に入り、授業実践も大分重ねてきて、授業力も各自なりに高まってきているところです。今回は、学習指導における「評価」を考えていきたいと思います。

評価は、教師にとっては自らの教育実践の効果を調べて自己点検をし、指導方法を修正していく意味合いと、児童・生徒にとっては教師による評価を通じて、自分の学習成果や学習活動を振り返り、学習方法や学習姿勢等を修正していく意味合いがあります。

すなわち、教師にとって評価は授業における指導の改善につながり、児童・生徒に対しては「自らの学習状況に気付かせ、自分を見つめ直す機会として、その後の学習を促す指導」にもなってきます。まさに「指導と評価の一体化」ということになります。

評価には、「総括的評価」、「形成的評価」、「診断的評価」等があります。「総括的評価」とは、指導終了後に児童・生徒が学習内容をどの程度身に付けたかを評価するものです。塾生にとっては、連続実習等を通じて指導を行わせていただいた単元の総括的評価を任せられ、その評価が概ね妥当なものであったかどうかを指導教員の先生から指導を受けることもあります。授業後に児童・生徒を適切に評価する塾生の「評価能力」を高めていく目的があります。

また、授業中に行う「形成的評価」とは、学習指導の途中において実施し、それまでの指導内容を児童・生徒がどの程度理解したかを評価しながら指導方法を修正したり、児童・生徒の個別の学習状況をチェックしたり、理解の不十分な児童に対して補充的な指導を行ったりするものです。塾生には、次のような「形成的評価」のポイントを指導しています。

- ◇ 個別の学習状況のチェックは具体的に行う。(例：赤ペンでチェックしながら声をかける等)
- ◇ 評価規準に照らして、到達の状況を個々のつぶやきやノート等の内容から座席表等に記録していく。
- ◇ 補充的な指導の際は具体的な方法で行う。(例：ヒントカード等を渡しながら助言する等)
- ◇ 机間指導をしながら個別に、グループに対して認知・賞賛・励まし等の声かけを頻繁に行う。
- ◇ 机間指導しながら次の指名者に相応しいかどうかをチェックする。(意図的な指名のための机間指導)

塾生には、児童・生徒一人一人の変容を丁寧に見取る評価を通して、児童・生徒の意欲を引き出したり、友達のよさに気付かせたりすることができるような教師を目指して行ってほしいと思っています。

## ◆ 教師として求められること ◆

東京教師養成塾教授 齋藤 辰雄

教師として求められることの第一に、教師の使命感をもつことがあります。教師として自分に課せられた任務を果たそうとする強い意志のことです。現役の教師が、教師の使命について次のように述べています。

- 全ての子供が、自分の力で自分の将来を切り開く力を身に付けられるように導くことである。
- 授業が嫌になったり、下手なままだったりする教師は問題である。指導技術を高め続けることが教師の使命である。
- 人が人を育てる教師という職は、自らの人間性で子供を感化する職である。故に教師は常に自分を磨き続けるべきである。等々。

上記の言葉は、どれも教師としての強い責任感に基づいた使命感が溢れています。この気概ある高い使命感をもつことが大切です。

次に教養です。一般教養はもちろん、教師としての専門的知識や職業的知識を高め、広く学問や芸術、宗教などに接して全体的、調和的な教養を高める必要があります。教師としての高度な専門性も高い教養がバックボーンとなります。教師の高い資質・能力が教育を改善していくのです。

教師に求められている資質・能力は、使命感と教養だけではありません。高い教養や教師としての専門的能力も、豊かな人間性に支えられてこそ認められるものとなります。ふとした時に発した言葉やちょっとした言葉が、子供の成長に大きく影響していることがあります。教師の職務は、子供の人格形成に大きな影響を与えます。教職に対する強い情熱とともに豊かな人間性が求められています。

そのほかにも、教師である前に大人としての謙虚な姿勢や、学問への探究心等が重要な資質・能力となります。教育は教師と育師が合わさって教育となります。塾生には、指導することだけに偏ることなく、育てていく意識も高くもち、両面をバランスよく実践できる教師になることを期待して指導しています。